

「誘導ゆうどうにまんまと引つ掛かかったりいきなり怒り出したりわけわかりませんね。猛獣もうじゆうですか」

「うるさい！」吠ほえる僕。

「しかしあなたが既に戦えなくなっているのは事実です。諦あきらめるか借金するか選んでトヤゴ」

「ぐぬぬ……」ぐもつともすぎぬる。

「どうします？ ああ、ちなみにこのお店では身に着けているものを担保たんぽにしてもいいそうですよ。今までも何人かの男が身ぐるみを剥はがれていましたし」

「うんそれは知ってる」

「というかそう仕向けたのってきみだよな。」

「ちなみにまだあなたとゲームをしていたいというの事は事

実です。あなたがもしも身に着けているものを担保にする
というのなら、一度くらいは負けてあげてもいいですよ」

「……ぐぬぬ」

「担保に懐中時計とかどうですか？ そのポケットに入っ
てるやつ」「ちらりと彼女は視線を降ろす。「チーンしか
見えませんが、売れば結構値が張りそうですね」

「……これはダメ。絶対ダメ」

「？ 大事なものなんですか？」

「親の形見だよ」孤児院こじいんに僕が置かれたとき、これが一緒
に置いてあった、らしい。

「……」彼女は一瞬だけ目を伏せてから、静かに僕の
肩に手を置いた。「あとで取り返せば問題ありませんよっ。」

気づけば滅茶苦茶めちやくちやにつこりとした笑みを浮かべてた。

貴様は悪魔か。

じつとりとした視線を返す僕に、彼女は、

「というのは——まあ、さすがに冗談じょうだんです。では別のも

のを担保にしましょう。手始めにそのキャスケットとかどうです？ べつに無くても困らないでしょう？」

と、僕の頭をちよんちよんとつついてきた。

むむ。確かに。

これでゲーム続行できるのなら安いものかもしれない。べつに貴重品うなずつてわけでもないし。

僕は軽く頷うなずき、キャスケットを脱いで、そしてテーブルに置いた。

「じゃあこれを担保に——」

「待ちなさいマクミリア。畏わなよ」

横から視界に飛び出してきた手が、僕のキャスケットを頭に戻した。

リリエールだった。

「一度くらいは負ける——なんて言っているけれど、信じちゃだめよ。いつどこかで負けるとは言っていないわ。あなたが下着だけにされるまで負けないつもりでいるかも」

「そういうことか！」

「やっぱり悪魔だ！」

「どうかどうしてそんな単純な裏すら読めないのかしら。残念すぎて言葉もないわ」

「……………」

沈黙ちんもくする僕を後目に、リリエールは視線をずらす。

「私の連れ合いを虐いじめるのはそのくらいにしてくれるかしら。魔女まじよさん」氷河ひょうがのよう冷たい瞳ひとみは、イレイナに注がれた。

「あなたがマクミリアさんのお友達ですか。お名前は？」

「リリエールよ。よろしく魔女さん」

「イレイナです。よろしくお友達さん」

「そこに重なっているチップ、返してくれるかしら。元々は私のお金なの」

「ではお金をかけて取り戻してください」

「そうさせてもらおうわ」リリエールは僕の肩に手を置いた。

「とうとうわけだから邪魔^{じやま}。どいて」

僕が温め続けた席に腰^{こし}を下ろし、むすんとするリリエール。僕は彼女の耳元に、口を寄せた。

「……ねえ、勝算あるの？」

「当然よ」彼女も僕にならって声をひそめていた。「あなだが一方的に弔^{なぶ}り殺しになった後に子供みたいにわめいていた時にね、こっそり彼女に罹^{かか}った祈りを解いておいたわ。つまりもう彼女はギャンブルで全勝はできない」

「ほうほう……ん？　ちよつと待って。いつ来た？」

「わりと序盤に」

「……あのう。その時点で祈り解いてくれてもよかったんだよ？」

「ごめんなさい。フルハウス連発されて涙目になってるあなた
が面白かったから、つい」

せめてもう少し申し訳なさそうな表情をしてみても如何
だろうか。

リリエールは平然とした顔のまま膝ひざの上にバッグを乗っ
けた。五千万入るやつ。

「さあイレイナさん。ゲームをしまししょうか。私かあなた
の金が尽きるまで」

「つまりそのバッグのお金を私にくれるとこういうことです
ね？ わあい」

「ふふ……たわごとを言っているのも今のうちよ。私
はカジノの必勝法を知っているの。あなたなんて簡単にけ

ちよんけちよんにでぎるのよ」

「そうですか。以下略^{いかりやく}」

そしてリリエールは紙幣^{しへい}をテーブルに置き。

イレイナはチップをかけた。